

未来に残したいもの 伝えたいもの

第3回 平和と生命のつながり思う「食育・食農教育」に

荘銀総合研究所 研究顧問 東山 昭子

梅雨に入り、消毒薬も除草剤も使わない農場では、草刈り・草抜きの毎日である。柔らかく耕された山畑では、ヨシキリがけたたましく鳴き、天空に真向かい咲く朴の花にカッコウの声もほがらかだ。ミミズも蝶もみな、芳香のなかでいきいきと動き回っている。

映画「おくりびと」のアカデミー賞受賞、NHK大河ドラマ「天地人」の放送、食の安全・安心・美味を求める発信などが重なって、山形に「風」が吹き渡っている思いがする。撮影や観光で山形を訪れる方々が、映像の話題に重ねて、食の美味しさ、民情のあたたかさ、温泉の豊かさを語り、酒の楽しさを言う効果も加わり、ひととき「風」を感じるのかも知れない。

世界的な経済不況のなか、人々の求めるものが反転している。より人間的な精神文化的豊穡を求める世に対し、祖霊安らう山々にまもられて暮らす堅実な県民性が、輝きを増しているのかもしれない。井上ひさしはエッセイ「遅れたものが勝ちになる」で、高度経済成長の世界でビリを取ってきた農耕に根ざす世界観が、価値観の転換により、先進的な豊かさをよみがえらせてくると語っている。

「地産地消・スローフード」の言葉が、経済活動を動かし、偽りのない本物志向が続いている今こそ、地産地消をかけ声に経済効果だけを優先させることなく、将来も山形が「農業立県」として生き残ることができる、確かな遺産を受け継ぐべきだろう。そのためには、命のつながりを大切にし、平和な暮らしを続けるための「本物の価値」をしっかりと根付かせたいと願う。それが豊かさに直結する近道になるとの思いは深い。

かつて日本が三国同盟の中で、無謀な戦いを暴走し、国連も脱退し敗戦を迎えた時、日本国民の願いを集結させて織り上げられた一枚の綴錦織つづれにしきおりがある。作者は鶴岡市に生まれ、綴織工芸界最高の大家である遠藤虚籟。

虚籟の「阿弥陀如来曼荼羅中尊」はニューヨークの国連本部に贈呈され、今も正面玄関の壁面を飾っている。

当時、食うに事欠く寒さ厳しい中で、血のにじむ思いで織り上げられたこの綴錦織は、昭和31年日本が国連加盟を果たすきっかけを担ったとされる。虚籟がこめた祈りは「第二次世界大戦犠牲者怨親平等彼我一切万霊供養」。人間のみならず、かり出されて死んだ軍馬、焼き尽くされた草木にいたるまで、敵味方の区別なく供養するものであった。

その後、世界平和を祈念して作られた謹作の端糸やくず糸を埋葬して碑を建立し、庄内を世界平和発祥の地にしようと、昭和62年地元有志の浄財で鶴岡市丸岡の天澤寺境内に碑は建った。「糸塚」である。「たかがくず糸」にしない、切り捨てられる生命あつてのつながりを、虚籟の縁者である京都大学名誉教授の和田修二氏は「物質的な豊かさ」と引き替えに失われた心の安らぎ、あたたかさ、エゴの追求による激しい権力闘争、開発の名の痛ましい環境破壊などは生きとし生けるものの、やさしい生命のつながりを思わず、力あるもの、強い者、表だった者のみを良しとした近代化の今日的病癖でなくて何であろう。われわれの生は我々よりも弱いもの、傷つきやすい者の生によって支えられていることを自覚する、生命への畏敬と連帯感、責任感を共有すべき」と説いている。

小さな命、か弱い命を大切にする教育がもっと大切にされていていい。食育の基盤に「生命をいただく」「生命を育む」ことへの感謝と報恩の心を学ぶならば、安心安全の美味を育む農業者の誇りも、畏敬も働くだろう。農場に来る子供たちが大地にふれあう嬉しさを素直に表現するのに接しながら、やわらかく、やさしい生命への思いをつなげたいと願っている。